

「イクボス宣言」をしました！

本年1月19日に私は、長崎県下で市長として三番目の「イクボス宣言」に署名しました。その詳しい内容はGWで紹介していますのでご覧ください。

そもそも「イクボス」とは、育児に対して夫婦相互に支え合うことでワークライフバランスを保っていくために、「ボス」つまり組織の管理職が、現場のマネジメント力を高めていくことであると私は理解しています。つまり「働きやすさ」を追求し、自分の健康や生活をよりよいものにするための第一歩だと思います。

ここで12年前に初めて私が市長訓示を申し上げた内容が思い起こされます。それは以下の内容です。「私が社会人になった当時、上司から『給料の三倍働け』と言われたことがあります。それは三つに分けてまず一つは、自分の労働対価としての分、次に給料を与えてくれる雇用主の分、そして残るは社会への還元分です」。これを読むと「イクボス宣言」の趣旨と矛盾することが書いてあるように思えますが、当日のセミナーの講師を務められたNPO法人ファザーリングジャパン代表の安藤哲也先生がお示しになった「寄せ鍋型ワークライフ・ハッピーバランス」を見て、新たな角度から解釈できると思いました。

つまり自分の生活全体を例えた鍋の中には「家庭や趣味」「仕事」「地域活動」などがありますので、給料はその鍋全体に対する対価ということにすれば、鍋の中の三つの役割を果たすことで評価できるということです。だったら「給料の三倍働け」ではなく「仕事は給料の三分の一でいい」ということに聞こえるかもしれません。しかしそれは、目の前にある業務を三分の一に削減することではなく、仕事のほかにも自分には役割があって、そのバランスを保つ意識を高めていくことが重要だということです。その意識の先に心のゆとりが生じてくれば、自ずと「仕事だけが人生ではない」という「三分の一」効果が実感できると思います。

したがって、職場において業務の見直しや役割分担が重要となってきます。宣言には、「業務の効率化を推進し、職員が個人の時間を楽しめる働き方を応援します」「女性活躍の推進・組織の意識改革を進め、すべての職員が能力を最大限に発揮し、更なる市民サービスの向上に取り組みます」「育児や介護、地域活動やボランティア活動等に対し、積極的に参画できるよう、柔軟な働き方を応援します」とありますので、これまで以上に、業務改善や行政改革が必要となってくることを示されました。

こうなると管理職は大変になります。仕事そのものを複数の職員で共有できるような仕組みや、細部においても「見える化」を進め、円滑に事業継続を維持できる体制を立てなければなりません。ある意味、市長が「イクボス宣言」をしたということは、部長や課長の仕事が増えることになることを意味していま

す。ただし管理職が残業をすることは意味が失われます。上司が職場に居残れば部下は退庁しにくいからです。まさにここが管理職の腕の見せどころです。これまでも「ノー残業デー」を設定したりしましたが、これからは育児休業などを部下に積極的に取らせていく上司を、しっかりと評価していきたいと思えます。

それからもう一つ、宣言には「市内の企業や団体等に『イクボス』を推進し、子どもや子育てを社会全体で支えていくまちづくりに取り組みます」としています。

当然、市役所だけで育児を中心としたワークライフバランスを推進しても意味がありません。一方で、こうした流れに対して「公務員や大企業にはできることかもしれないが、人手不足の小規模事業者や農業・漁業には関係ないことだ」という冷ややかな声が聞こえてくるかもしれません。

実は私自身、イクボス宣言については、もっと早い段階ですることも考えていました。しかし当時の雰囲気では「公務員が先んじて宣言をすることを民間企業や市民は、あまり歓迎しないのではないか。むしろ民間サイドから進めてもらい、その後、市役所が採用することでいいのではないか」という助言があったことが理由で見送ってきたのです。

しかし、民間サイドが先行して機が熟すことを待っていても、時代は流れ、若い人たちの職業観も変わっています。そのことが「田舎で働くこと」を遠ざけ、人口減少に拍車がかかることになれば、ためらうことなく実行に移さなければなりません。

「イクボス」は、単に「育児休業を勧めるボス」だけにとどまらず、地域人材の「育成」であり、社会や家庭を「育む」という観点でカタカナの「イク」が当てられたのだと理解しています。先に紹介したセミナーでも明らかになったように、「イクボス」を推進した企業は全て業績が上がり、よりよい人材が集まるようになったと報告を受けています。

平戸市は、育児に温かく向き合う人や企業がたくさんいる街になることが、これからの「ずっと住みたいまちづくり」への近道になると思います。

市長の「イクボス宣言」が形だけのものにならないためにも、職員各位のご理解と積極的な意識改革、業務改善への取り組みをよろしくお願いします。

令和4年2月3日

平戸市長 黒田成彦

(次のページにも、オマケがありますので、ご一読ください)

## 【追記】

皆さんご存じの通り、私は新型コロナウイルスの濃厚接触者として1月27日から2月2日までの一週間を経過観察期間とし、自宅待機となりました。

このことは1月31日の定例記者懇談会を通して新聞紙上でも紹介されたことで、少なからず市民の皆様にもご心配をおかけした次第です。お陰様で、その後「陰性」のまま発熱することもなく無事に2月3日に公務復帰することができました。

記事にあった「親族」とは、佐々の自宅に滞在していた長男のことであり、彼は新型コロナウイルス特有の発熱があり「陽性」ということで、自宅療養となりました。発熱の前日、私とともに長男の傍にいた妻は、翌日以降も佐々とどまり長男の看病をしたのですが、日曜日の検査では「陰性」でした。

佐々の自宅には消毒液すらなく、まして医学・疫学的にも素人の妻は、特別の感染防護対策をする訳でもないのに、いまだ発症もせず「陰性」のまま長男の自宅療養に付き添っています。この不思議な実態については、後日、科学的見地から何らかの解明が期待されるところです。(笑)

さてこのような状況によって、私は平戸の自宅において自炊することとなりましたが、期せずして「イクボス宣言」をした次の週から、妻が担っていた家事全般を経験させられることになった次第です。

当初は、インスタント食品などでやり過ごそうと考えていましたが、妻が30日の県北保健所での検査の帰りに平戸の自宅に立ち寄り、たくさんの食材などを供給してくれました。それこそ私に感染させてはいけないと思ってか、二重のマスクに手袋をしたまま大きなレジ袋を抱えて「あとはがんばって！」というセリフを残し、颯爽と佐々に帰っていきました。

その後は、山積みされた野菜や肉などの材料を見比べながら、スマホで検索した料理のレシピを参考に、いろいろな調理に挑戦しました。やってみると面白いもので、冷蔵庫の中の食材の種類をいったん記憶し、その組み合わせや食べるタイミングなど数量を計算しながら違った成果品（料理）を生み出していく作業は、今までに使っていない脳細胞を活性化させていくような快感でした。

またその料理をスマホ上の家族共有のタイムラインに投稿し、生月の父親や子どもたちから賞賛されることも喜びの一つになりました。何より自分で作った料理は、なんとなく美味しいものです。ただ独りで食べるのは少し寂しい気もしましたが。

いずれにしても、その他の洗濯や掃除、ゴミ出し、鉢植えの水やり、アイロン掛け等、家事のほとんどを経験するいい機会となりました。こんなことならもっと早い段階に経験すればよかったと少しだけ反省しています。

どうか皆さんも、すすんで家事と向き合いましょう。楽しいですよ！